Vol. 76　2010年4月

国際交流センターニュース

International Center Newsletter

北見工業大学 国際交流センター　〒090-8507 北見市 公園町165

晴れ男三人衆によるハルビン奮闘紀行

国際氷雪祭で知られる、中国東北部の町ハルビン。中国の冬の風物詩ともいえるこの一大祭りに平行し、本学の協定校ハルビン工程大学では年の初めにキャンパス内にて「国際大学生雪像コンクール」を開催しています。各国からのチームがそれぞれの技術と芸術性を競いながら親交を深めることを目的としたイベントで、昨年に引き続き本学からもひとチームが参加しました。チームのボス、研究協力課の谷川課長による報告です。

国際交流協定を締結しているハルビン工程大学の招待を受け、機能材料工学専攻１年結城（通称：ゆっきー、写真左側）、情報システム工学科４年副島（通称：そえじー、写真右側）、そして私（通称：あっくん）の３人が「国際大学生雪像コンクール」に参加した。この大会に本学が参加するのは２度目、日本からは唯一の参加であった。場所はハルビン工程大学構内で、中国のほか、韓国、ロシア、タイ、アメリカ、イギリスなど世界各国から計３３大学が参加した。

研究協力課長
谷川　敦（写真中央）

前日まで中国は零下４０度のひどい寒波に見舞われ、その後韓国、日本へと寒波は移動したが、我々晴れ男３人衆は、この寒波を避けるかのように関西空港から仁川空港を経由してハルビンに到着した。まさに日本が寒波・大雪に見舞われている時にハルビンに到着したわけだが、そうはいってもさすがに「氷の都」ハルビン。寒さが半端ではない。陽が沈みかけると急激に冷え込み、平気で零下２５度になる。これでも例年より暖かいとのことであった。

さて、この雪像大会は、開会式での関係者の挨拶の後、制作する雪像の位置取りを決める抽選を行う。我がチームはそえじーが代表してくじを引き、２番を引いてきた。センターポジションをゲットできなく残念に思っていたが、終わってみれば２番くじは抜群の引きであったとの思いを強くすることとなる。

与えられる道具はでっかい「のみ」と「やすり」。ただし、各大学で持参した道具の使用は認められている。何にも知らない我々は与えられた道具だけで勝負をした。２番のポジションを与えられた我がチームは、全長約３００メートルは優にある一直線のコンクール会場の右端に陣取って作業を開始した。

スタートは角砂糖のような雪の固まりであり、のみを使ってひたすら削り雪像に仕上げていく（写真１）。削りすぎると一巻の終わり。最初の一突きはビクビクであったが、実質３日間で作業を終えなければならず、時間も押し迫り徐々に大胆になって行った。

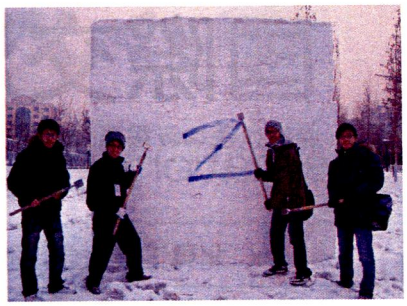

写真１　巨大な角砂糖の前で、のみを手に

我がチームには、昨年電気通信大学に留学していたハルビン工程大学の張さんが毎日助っ人として手伝ってくれた（写真１の左端の方）。制作した雪像は、表に「だるま」、裏に「招き猫」の縁起物。ハート形で掘った穴は表と裏で繋がっている。「どうやって繋げたのか？」と我がチームの高度な（？）テクニックに驚いたチームも多数あったところ。答えはひたすら掘り続けるのみであるのだが、絶対条件は体がスリムであること！というわけで、私が掘ったのはのみが届く距離まで。その先はゆっきーとそえじーと張さんの涙ぐましい努力の賜であり、貫通の瞬間４人で雄叫びを上げたほどであった。

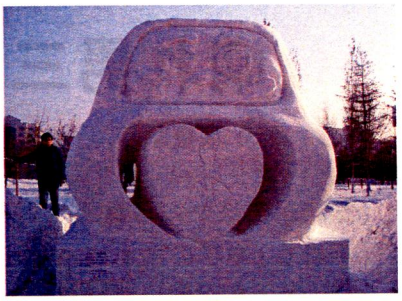

写真２　本学完成図（正面）

制作上の困難はかっこ良く言うなれば芸術性！「だるま」も「招き猫」も曲線美を表現することが非常に難しかったというのが率直な感想。とりわけ「だるま」は頭で描いていたものとは違って実はくびれがなく、何とも愛らしい滑らかな丸みでできている。一方、「招き猫」は、しっかりとしたくびれがあって、メリハリが重要。こんなことを気にかけながら、極めて強い協力と、良好な関係と、涙ぐましい努力のもと無事雪像を完成させた（写真２・３）。セールスポイントは唯一の離れ業である招き猫の「しっぽ」。体が間えて穴掘りができない分、あっくんがビビリながらでっかいのみを巧みに（？）操って完成させた。

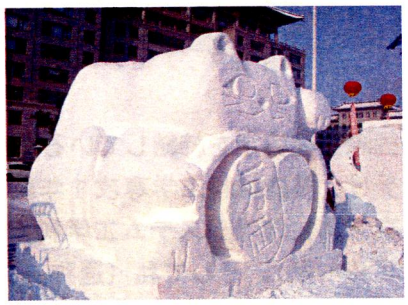

写真３　本学完成図（裏面）

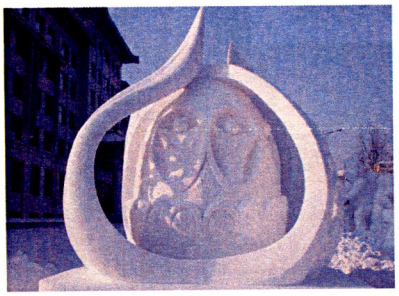

写真４　ロシアチームの作品

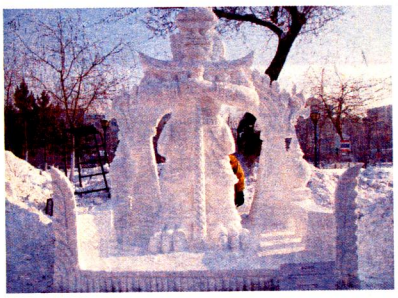

写真５　タイチームの作品

写真６　タイチームの道具

審査の結果は「参加賞」。残念といえば残念であったが、「同じ人間が制作した雪像？」と思うような芸術的な作品がずらりと並ぶ中、一際お茶目な雪像を制作した我がチームであったから、結果には十分納得である（センターポジションでなくて本当に良かった！）。

ご参考までに、宿泊ホテルが一緒ですっかり仲良くなったロシアの大学の雪像は写真４。第１位グループに選ばれた３大学のうちの１つです。写真５は同じく第１位グループのタイの大学の作品。道具はこんなん使ってます（写真６）。我々もこの道具さえあればいけたかも！？　第１位グループはもう１チーム。中国の大学の作品です（写真７）。

ちなみに、各大学による人気投票では、我がチームは２票獲得！

名刺でビンゴ！@ International "C" Hour

４月のインターナショナルＣアワーは、２０日火曜日に開かれ、７０名近くが集いました。例年、４月のＣアワーはゲームでにぎやかなときを過ごしますが、今回もＯＦＩＣメンバーが自己紹介ゲームを企画。ただ、例年と違ったのは、ゲームの説明を４名で、日・英・中・韓の４ヶ国語で行ったことで、日ごろの語学学習の甲斐あって当該言語の留学生に見事通じると、会場から拍手があがっていました。

この日のゲームは、各自が名刺を作って交換し、カードの裏に書かれた番号でビンゴを競うというもの。留学生の中では中国出身の大学院生、リュウ・ジュンチャオさんが２位に入賞し、賞品に一万円札を連ねたデザインのトイレットペーパーをもらってのけぞっていました。

韓国から新しく来た短期留学生、イ・ジュンオさんは、「新しい人にたくさん会えてよかったです。年配の日本人が韓国語を話すのは聞いたことがあったのですが、若者は初めてで、それも印象に残りました」と笑顔で話していました。

（自分達のチームには投票していませんので、念のため。）最多はタイチームでした。

ハルビン工程大学では、国際交流を担当されておられる先生方と様々な課題等について意見交換して参りました（写真８）。今後益々交流を深めて行くことを確認した次第。

子どもの頃に感じた「痛い」寒さを久しぶりに感じたハルビンの冬。短期間ではあったが、雪像作りを通して国際交流の素晴らしさ・深さ・楽しさを経験できた。

このような機会を与えて下さったことに深謝して結びとします。本当にありがとうございました。

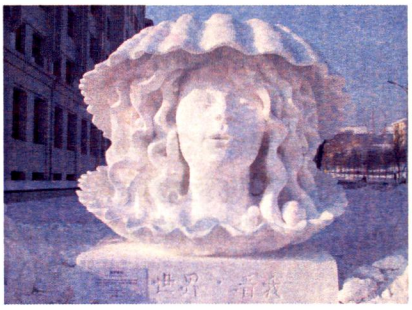

写真７　中国チームの作品

写真８　ハルビン工程大学の国際交流関係者と

はじめまして・どうぞよろしく

４月より、国際交流センターに二人の新しいメンバーが加わりました。国際交流担当の菊池職員、日本語担当の鈴木講師です。日本語担当の非常勤、尾山講師と合わせてご紹介します。

鈴木　衛　講師

私のモットーは、人として対等に接することです。このことは留学生に対しても同様です。そのため、お互いコミュニケーションを通じ、いちはやく相互理解を図っていきたいと思っています。留学生の皆さんも、遠慮なく教員室のドアをノックしに来て下さい。

菊池　翔　職員

今年から北見工大で働くことになりました菊池翔です。以前は東京で働いていました。英語はほとんど話せませんが、日本語は話せます。僕を大笑いさせると山岸センター長から奨学金が支給されますので（笑）、挑戦してみてください。これからよろしくお願いします。

尾山　勝久　非常勤講師

４月から留学生の日本語教師になりました。たくさんの留学生と友達になれて喜んでいます。私の夢はもっともっと中国語が上手になって、中国各地を旅行することです。

お知らせ

＊　今学期は３２名の新しい留学生を本学に迎えました。学部入学者１２名、３年次編入生３名、博士後期課程入学者３名、および提携校からの交換留学生１４名です。次号で顔と名前を紹介します。

＊　新しい留学生の歓迎パーティを、５月２４日（月）に催します。留学生とチューターの参加は無料です。屋外で炭火を囲んで焼肉を食べながら、楽しいひと時を過ごしましょう。詳細は別途お知らせしますので、国際交流センターまで申し込んでください。

＊　留学生の健康診断を５月１９日（水）１１時～１２時半に行います。留学生の皆さんは全員必ず受診してください。

＊　夏休みを利用した語学研修を企画しています。今回は英語研修（９月　カナダ）と、中国語研修（８月台湾）で、期間はどちらも３週間です。詳しいことは国際交流センターまでどうぞ。修了すると「異文化理解」の２単位が取得できます。

World Wisdom

いつまでも生きる運命だと思って学びなさい。
明日死ぬ運命だと思って生きなさい。
―マハトマ・ガンジー
（インドの宗教家・政治指導者）